

〈平和への願いを託して〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

戦後七〇年、山田洋次監督が世に問う念願の映画である。故・井上ひさしさんの遺志を映画化、曲がり角にきたこの国の平和と戦争を今改めて問いかける。とはいえ、お話は母と息子のやさしくて悲しい愛情物語である。

舞台は、敗戦から三年後の一九四八年八月九日の長崎。助産婦の伸子（吉永小百合）は、一人息子の浩二（二宮和也）が長崎医大で授業中に原爆を受けて亡くなり、今は一人暮らし。浩二の墓参りに行ったその夜、茶の間に浩二がひよつこり現れる。「もう、息子のことはあきらめた」と墓前で言ったばかりの伸子は、思わず「あんた、元氣なの？」と問いかける。「僕はもう死んでるんだよ。相変わらず、おとほけだね、母さんは」と大笑いをしながら「母さんはあきらめが悪いから、なかなか出てこられなかったとさ」と答える浩二。亡霊とはわかっていてもうれしく懐か

しい、何か甘やかな母と息子の空気が流れる。

浩二には許婚・町子（黒木華）がいた。小学校教師をしながら、この三年間伸子に何くれとなく気を掛けてくれる優しい娘さんだ。でも、もし今後町子に好きな人が現れたら、その時は……

「嫌だ！町子には僕しかおらん！」と猛然と反発し、いったんは涙とともに消える浩二も、再び現れた時には、「これも僕の運命だからしょうがないよ」ときっぱり。だが、伸子は毅然として言うのだ。「違う。地震や津波は防ぎようがないから運命だけど、これは防ぎえたことなの。人間が計画して行った大変な悲劇なの」と。浩二は浩二で、死者の立場から、自分が町子の今後の幸せを祈る気持ちになったのは、実は自分だけではなく、自分と一緒に原爆で死んだ何万人もの人たちの願いなのだ、だから「生き残った」町子は僕た

ちの代わりにうんと幸せにならんばいかん」と囁みしめるように語る。

この映画では闇屋の親父から小学生の女の子まで登場人物のセリフがきらりきらりと随所で光る。とりわけ、この二人きりの茶の間で、原爆で若い命を奪われた医学生の子・浩二の亡霊と生き残った母親・伸子とがしみじみ語り合う場面は聞かせどころだ。このセリフを言わせたいために映画をつくったとさえ言えるだろう。本作を「生涯で一番大事な作品」と位置づける山田監督は、かつて井上さんが広島を舞台にした「父と暮せば」と対になる作品を長崎を舞台につくりたいと言っていたことを知り、その遺志を継ぐ形で本作を撮ったという。「泉下の井上さんと語り合うような思いで」脚本を書いたというだけに、親子の愛情を通して平和と反戦への願いを若い世代へ託したい思いが切実に伝わってくる。

冒頭の一九四五年八月九日、米爆撃機から見下ろす雲間の長崎市街、原爆投下後の地獄絵図……これまでも何度目にしたはずの映像が、改めて不気味に見える者に問いかける、これは本当に過去の、終わったことなのか、と。心に残る音楽は、坂本龍一の復帰第一作。



『母と暮せば』

日本映画 (130分)

監督：山田洋次

出演：吉永小百合、二宮和也、黒木華ほか

公開中

© 2015 「母と暮せば」製作委員会